

## 『源氏物語』 紫の上についての小論Ⅰ・Ⅱ

伊藤 雅子

『源氏物語』の多くの登場人物の中でも、紫の上は源氏にとっても最も重要な女君として登場する。その魅力は何なのか。幼いころ源氏によつて見出され、手元に置かれ、育てられた彼女は、源氏にとつてどのような存在になつていったのだろうか。そのことを考えるために、次の二つの文章を書いた。

小論Ⅰでは「自由な心」と題して、彼女だけが持っていた、ある魅力について論じる。小論Ⅱでは「呼応する表現」と題して、『若菜上』巻における一つの表現に注目し、源氏の心の中における、藤壺の宮と紫の上との関わり方について考察する。

### Ⅰ 自由な心―走り来たる女子―

#### 生徒からの問題提起

『若紫』巻の垣間見の場面、と言えば、だれでもすぐに思い浮かべることが出来るほど有名なところだ。源氏と紫の上が出会うことになるその場面で、のぞき見た源氏の目に映ったのは、「走り来たる女子」だった。なんと、女主人公は走つて登場するのだ。

授業でもしばしば扱う場面であるが、このような登場の仕方をほほえましく思う生徒はいても、疑問に思う生徒はそう多くはなかった。しかし今年度の生徒の中に、たった一人、質問をしてきた者がいる。

三年男子の質問。「紫の上がはじめて登場する場面に『走り来たる女子』とあるが、身分の高い姫君の行動としておかしくはないのだろうか。―至極もつともな疑問だ。この問題について、私の考えたことを述べたい。

#### 自由さ、おおらかさへの評価

同じ『若紫』巻で、重態の尼君を源氏が見舞う場面がある。尼君から姫君の将来を託された源氏が、姫君のお声をお聞かせくださいとリクエストする。いくら幼いとは言え、姫様に男と直接話をさせるなんてとんでもない。女房が、いえいえ、ぐつすりお休みになっていきますから……と体よく断つたちようどその時、奥からやつてくる姫君。「おばあさまは源氏の君をごらんになったの」と大声で語りかける。人々は「かたはらいたし」と恐縮し、源氏は聞かないふりをしてその場を立ち去っていく。これも、前の場面と同様に、姫君の行動は自由奔放だ。

そのほか、尼君の死後に源氏が見舞つた際も、「直衣着たる人はいづら。(父君である)宮のおはするか。」と、奥から出てきてしまう。源氏に引き取られてからも、帰ってくる源氏を自ら出迎え、源氏の膝に乗つて話を聴く。夕方源氏が女性の所へ出かけようとすることを寂しがり、源氏の慰めを聞いている内に、その膝の上で寝てしまう。

なんとという自由さ、おおらかさ、素直さであろう。これらは幼さの表れとも言えなくはないが、出会いの場面ですでに、彼女は「十ばかりにやあらむ」という年齢である。当時としては、しとやかな態度が重視されてしかるべきだ。

このように少女の言動に対し、現代の読者ならば、きわめて好意的な印象を持つであろう。では、平安時代の読者はどうだったのだろうか。質問者が指摘しているように、これらの行為は高貴な血筋の姫君にふさわしいものではない。「不作法だ」「非常識なことよ」と思う読者もいた

ことだろう。確かに、当時の価値観に則って言うならば、これらの行為によって、彼女に対しマイナスの印象を持つもおかしくはない。しかし、そうはならない。物語が、そのようには語られていないからである。何よりも、源氏自身の思いを経て描かれる少女の印象は、飽くまでも「うたく」「うつくしく」「いはけなき」ものだ。たとえば前述の見舞いの場面では、源氏は少女の声を「いとをかしと」聞き、出迎える場面では「いみじくうたきわざなりけり。」と思う、と描かれる。

『源氏物語』における語り手は、登場人物の心の中に自由に入り込み、その心中を読者に対して紹介する。読者は源氏の目を通して少女を見、源氏の心を通して少女を感じるようになるのである。その結果、たとえ当時の常識を越えたものであったとしても、読者はこの少女の自由な心を愛することになる。もちろん、物語の世界の中のこととして。

### 源氏を魅了したもの

さて、この自由な心は主人公たる源氏にとって、どのような意味を持つものだっただろうか。源氏が少女を拉致し、自分の邸宅に連れてきてから、二人はともに暮らし始める。藤壺の「形代」として求め、そばに置いたはずの少女だった。はじめて見たときの源氏の思いは、「かの人の御かはりとして、明け暮れの慰めに見ばや」であったのだから。が、さて、いっしょに生活する中で、源氏の心を慰めたのはなんだったか。

巻巻を読んでいくと、成長した少女を見て「藤壺の宮にますますよく似てきたなあ」と源氏が述懐する場面は確かに時々出てくる。しかし、それだけが少女の魅力かという点、決してそうではない。むしろ、藤壺にはなかったもの、というより、この子だけが持っているものに源氏は強く心惹かれ、思わず笑みをこぼし、いとしさを募らせていく。それは、源氏にとっても、また読者にとっても、全く予想外の展開だったので

ないか。この子だけが持つ魅力——素直さ、明るさ、率直さ、澁刺とした態度と反応——それらはすべて、何ものにも縛られぬ「自由な心」から生まれる。その「自由な心」を象徴していたものこそが、出会いの場面の「走り来たる女子」だったのだと思う。

このことを意識的に表現している作品として、漫画の『あさきゆめみし』がある。第8巻（『若菜下』巻）に次のように描かれる。いったんは危篤に陥ったものの、持ち直した紫の上を見舞いに訪れた源氏。今日はすこし具合が良いというので、紫の上は髪も洗って涼しげにしている。

二人は和歌を唱和し、源氏は穏やかな気持ちで、体調を崩しているという女三宮のもとへ出かけていく。原文ではその後源氏と女三宮のようすの描写に移るのであるが、『あさきゆめみし』は新たに紫の上の気持ちを加えて描くという試みをしている。その内容は以下のとおりである。

二条院の庭をながめながら、ここで過ごした少女時代の追憶をたどる紫の上。目に浮かぶのは、その二条院の庭を、遊び友だちでもある女の童、犬君と「駆け回る」幼い自分。紫の上は思わず追おうとするが「待つ……」とつぶやく間もなく幻は消え失せる。

「女は、いつ自由を失ってしまうのだろう」  
「もう……とりもどすことのかなわぬ……」と、紫の上は涙する。

ここでも「駆け回る」少女は自由な心の象徴であると解釈している。それは、かつて紫の上自身が持っていたもの。そして今は、失ってしまったものだ。

また「自由な心」の表れは「走る」ことばかりでない。大人となった紫の上は、まさか「走る」ことはできない。しかし、精神的「自由」、表現の「自由」はあり得る。たとえば、嫉妬の表現だ。源氏が深い関係を持った女に対して、紫の上はしばしば嫉妬する。当時の高貴な女性は、

嫉妬を外に表すことをよしとしないはずなのだが、彼女は素直にそれを表現する。《濔標》巻において、源氏が明石の君との関係を打ち明けた場面などは典型的な例だ。彼女は「ただならず思ひつづけたまひて」「我は我とうち背きながめ」て、「うち嘆き」、恨めしい気持ちを和歌に詠む。

源氏がいつしよに琴を弾こうと誘っても、「かの（明石の君が）すぐれたりけむもねたきにや」「手も触れたまはず」かわいらしくもの柔らかなさまではあるが「さすがに執念きところつきて、もの怨じたまへる」ようすなのだ。しとやかに嫉妬を隠そうなどはせずに、源氏に対し、実に素直に自分の心を見せるのである。そんな嫉妬のさまは源氏にとって「なかなか愛敬つきて」「をかしう見どころあり」―かえって魅力であつて、おもしろくお相手のしがいがあるのだという。

しかし《若菜上》巻からは、変わっていく。女三の宮を新たな正妻とした源氏に対して、心の内を閉ざしてしまう紫の上となる。いままでの、素直に嫉妬するという心の自由を自ら封じるので。

さて、このように見ていくと、少なくとも少女時代の紫の上、源氏への信頼に満たされていた時の紫の上については、「自由な心」の表出が、そのまま彼女だけの特別な魅力となつて源氏を魅了し、読者を魅了していたと言つて良い。現代に生きる人間として、私はこれを「自由な心」と呼んでいるが、平安時代の人々は、どんな言葉で表現するのだろうか。これはよくわからない。だがともかく、当時の常識的な価値観、一つの型に決められた態度から脱したところに、ひとりの女性の魅力を描き出すようにした作者の思いがあることは、間違いないことだと思う。

しかし、《若菜上》巻以降、彼女は変わる。今までの紫の上とは変わっていくけれど、源氏にとつてもっとも大切な女性となつていくことが確認される巻でもある。そしてその《若菜上》巻において、紫の上の存在

の意味を示す、衝撃的な表現に我々は出会うのだ。

小論IIにおいては、藤壺との関わりを示す箇所を引用しながら、その表現の意味について考えたい。

## II 《呼応する表現》の意味―二人の女君―

### はじめに

紫の上は、藤壺の宮の「形代Ⅱ身代わり」として源氏に見出され、彼のもとに連れてこられた。果たして紫の上は、この「形代」という存在から脱したのか。源氏の心の中で、紫の上は藤壺の宮とどのように関わり、どのような存在となつていったのだろうか。

そのことを考えるために、紫の上と藤壺とを比較した表現に注目して解釈していきたい。

### 「藤壺に似ている」ことから始まった

《若紫》巻で、少女（紫の上）は、藤壺の形代として引き取られた。手元に置いてその成長を見守る源氏は、小論Iで述べたように、彼女だけが持つ自由さ、おおらかさによつて心を満たされる。しかしどうかすると、少女の中に藤壺の面影を見ようと、その「形代」でもあることを望んだ。二人が似ていることは、源氏自身が求めていたことであつた。最初の出会いは、《若紫》巻である。

【本文①】つらつきいとらつたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかひやりたる額つき、髪さしいみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人いよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙そ落つる。《若紫》巻

このように気づき、

【本文②】かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや、《若紫》巻と強く願う。

その後、紫の上との結婚の直前にも、藤壺の面影を見出して喜ぶ源氏がいる。

【本文③】「久しかりつるほどに、いとよなうこそおとなびたまひにけれ。」とて、小さき御几帳ひき上げて見たてまつりたまへば、うち側みて恥ぢらひたまへる御さま飽かぬところなし。灯影の御かたはら目、頭つきなど、ただかの心尽くしきこゆる人に違ふところなくもなりゆくかな、と見たまふにいとうれし。《葵》巻

結婚後、源氏の愛はますます彼女に注がれ、手放せぬ存在になっていく。そして《賢木》巻には、藤壺の部屋に密かに入り込んだ源氏が、藤壺を垣間見て嘆ずる箇所がある。

【本文④】髪さし、頭つき、御髪のかかりたるさま、限りなきにほはしさなど、ただかの対の姫君（＝紫の上）に違ふところなし。年ごろすこし思ひ忘れたまへりつるを、あさましきまでおぼえたまへるかなと見たまふまに、すこしもの思ひのはるけどころある心地したまふ。《賢木》巻

ここに、気になる表現がある。「年ごろすこし忘れたまへりつるを」とあるところだ。藤壺に似ているからこそ奪い取った姫君だったはずなのに、それを「すこし」であったとしても、忘れていたとは。それほど、対の姫君―紫の上自身の魅力が大きかったということなのではないか。

そのあと「あさましきまでおぼえたまへるかな（＝驚くほど似ていらっしやるなあ）」と再確認し、「すこしもの思ひのはるけどころある（＝いささか憂いの晴れてくるような）心地したまふ」とあるのは、「ああ、そうだった。藤壺の代わりとして得ていたのだが、まことによく似ていた

ことよ。私の目に間違いはなかったな。」というところか。

この直後に藤壺が出家し、その後、《須磨》・《明石》の巻を経て、源氏は苦難の日々を送る。しかしまもなく都に召還されて、権力を回復していく。《薄雲》巻で藤壺の死。続く《朝顔》巻には、自分と関わりのあった女君達について、源氏が紫の上に語る場面がある。藤壺について源氏が語った後半の部分は、

【本文⑤】やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたる所の並びなくものしたまひしを、《朝顔》巻

現代語訳するならば、「ものやさしくおうようでいらっしやるものの、深いたしなみがおありのところ、他に比類なくいらっしやいましたものを、」となるが、これは「はしなくも藤壺と情交のあったことを暗示する」発言となっていると指摘されている。（参考資料③による）

亡き藤壺のすばらしさを思い出した源氏は、

【本文⑥】（紫の上は）外を見出だして、すこしかたぶきたまへるほど、似るものなくうつくしげなり。髪さし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえてめでたければ、いささか分くる御心もとりかさねつべし。《朝顔》巻

とあるように、目の前の紫の上に再び藤壺の面影を見出し、「いささかほかに分けられていたお気持ちも、紫の上のもとにきつと取り戻されることになるであろう。」とあるとおり、彼女への愛情をより深いものとして認識することになる。

こうして源氏は、失った藤壺を想いながらも、そばにいる紫の上その人を愛していく。藤壺に似ていることのみならず、紫の上ならではのさまざまな魅力が彼をとりこにする。藤壺亡き後、彼女はもつとも理想的な女性として源氏に深く愛されていく。紫の上はもはや、「形代」ではな



い。また【本文⑥】以降は、二人を重ねた直接的な表現が見られない。藤壺の存在はなきがごとしである。しかしよく読めば、あと一箇所、あるのである。語り手は説明しないが、注意深い読者によってそれは発見される。次の章で指摘し、考察したい。

### 呼応する表現

《若菜上》巻に、紫の上の次のような描写がある。四十歳となった源氏が若き内親王、女三の宮と結婚した三日目の夜。当時の約束事に従って宮と夜を過ごしたものの、源氏は紫の上の夢を見る。いても立ってもいられなくなった彼は、早起きの鶏の声を聞くやいなや、急いで紫の上のいる東の対に向かう。そして弁解しつつ、寝ている彼女の横にすべりこむ。彼を迎えた紫の上は、次のように描かれる。

【本文⑦】「うらもなくなつかしきものから、うちとけてはたあらぬ御用意など、いと恥づかしげにをかし。限りなき人と聞こゆれど、難かめる世をと思しくらべらる。《若菜上》巻(第34巻目)」

この表現にふれた時、はるかかなたにあった場面が思い出された。二十九巻も前にある《若紫》巻である。ここには、里帰りしていた藤壺の部屋を源氏がひそかに訪れ、一夜を過ごす場面がある。その描写は、次のとおりである。

【本文⑧】(藤壺の宮は)なつかしうらうたげに、さりとしてうちとけず、心深く恥づかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させたまはぬを、なごかなのめなることだにうちまじりたまはざりけむ、と、つらうさへぞ思さる。《若紫》巻(第5巻目)

用いられている語の意味といい、置かれている順序といい、あまりにも似ている。女は「なつかしく―こちらが思わずふれたくなるような、やさしい態度で」「しかし」「決して気を許すことはなく、りんとしてい

る。」「その深い心遣いは」「源氏が恥づかしくなるほど立派な態度」なのだ。「他には、こんな女はいない…。」そしてまたこの内容は、おそらくは寝所における藤壺のようすを述べた【本文⑤】とも重なる。

呼応しているのは言葉だけではない。いずれも、御帳台の中で男と女が一對一で向かい合う場面、目の前にいるのは、源氏のもっとも愛する女君である。源氏は相手を強く求めているのに、女はやさしく対しなからも自分の心すべてを委ねることをしない。女も、男も、切ないのである。

《幻》巻に、源氏が亡くなった紫の上を追慕する場面がある。ことに、前に挙げた《若菜上》巻の暁のことを思い出しては、彼女につらい思いをさせたことを深く悔いるのであるが、そこにもこの描写がくり返される。

【本文⑨】雪降りたりし曉に立ちやすらひて、わが身も冷え入るやうにおぼえて(中略)なつかしうおいらかなるものから、袖のいたう泣きぬらしたまへりけるをひき隠し、せめて紛らはしたまへりしほどの用意《幻》巻源氏にとつて、紫の上のこの態度は、つらく、しかしもつとも大切な思い出となっているのだと言えよう。

さて、先ほどの表現にもどうだろう。【本文⑦】は、源氏が新婚の女三の宮の隣を抜け出て、傷ついた紫の上のところに戻ってきた場面にある。冗談めかして弁解をしつつ、冷えた体を温めて欲しいと紫の上の脇にすべりこもうとする。源氏の求めたのは、「紫の上その人」であったのだ。ところが皮肉にも、その時にこそ紫の上は、《若紫》巻の藤壺と一致していた。かつて、若き源氏の激しい愛をつらい気持ちで受け入れた藤壺の描写が、紫の上にとんとそのまま用いられている。これをどのように解釈することができるのだろうか。

私は思う。藤壺と紫の上が、ここではじめて、全く同じ存在になったことを示しているのだと。源氏にとつて藤壺はずっと、手の届かぬせつない究極の愛の対象であり、紫の上は現実世界においてもつとも愛している女であった。ところが源氏の「あだなる」「心弱き」行動のために心身共に弱ってしまった紫の上は、この結婚以降、源氏に対して心を閉ざしてしまふ。「つれなし」という形容が繰り返し用いられ、源氏にすべてを委ねることができなくなる。藤壺と表現が一致したこの時、紫の上は藤壺と同じように、源氏が愛してやまない、しかし彼の手の届かぬ存在となつてしまつていた。そのことを、象徴しているのではないだろうか。

また、初めに挙げた例もそうだけれども、読んでいて、呼応している表現を感じとれば、必ず前の箇所も読み直す。前の描写（藤壺の）と、今の描写（紫の上の）を比べ、重ねた時、藤壺の切なさ、紫の上の切なさ、二重の情感となつて、我々読者の胸にせまってくる…。

平安時代の人々は、繰り返し繰り返しの物語を読み（あるいは聴き）、一つひとつの表現に心をすましていく。ヒロインとも言うべき二人の、源氏との愛の描写に敏感でないはずはない。《若菜上》巻を読んだ時、人々は思う。「これはどこかで見た。」記憶の糸をたどりながらいくと、幾巻も隔てた《若紫》の巻に、とてもよく似た表現が載っている。主語は、藤壺の宮。ああやっぱり、と読者は思う。そして、どうしてこうなっているのか、自分でその理由を考え、自らの鑑賞の世界を創っていくだろう。それが、作者紫式部の望んだことなのだと思う。

私は、平安時代の人々と同じように感じて読みたい。『源氏物語』は、熱心な読者にいろいろなことを教えてくれる。私もその一つひとつに気づき、作者と心を響かせあいたい。そんな思いで、いつもページをめくるのである。

\*引用した本文は、参考資料①による。

#### 参考資料

- ① 阿部秋生 秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳  
新編 日本古典文学全集 「源氏物語」 小学館
- ② 川島絹枝 『源氏物語』の源泉と継承 笠間書院
- ③ 玉上琢也 「源氏物語評釈」 角川書店
- ④ 三谷栄一編 「源氏物語事典 増補版」 有精堂
- ⑤ 大和和紀 『あさきゆめみし』 講談社

（後記） 小論Ⅰは、筑波大学附属高校の三年生を対象とした授業の中で生徒から出された質問をきっかけに考察したものである。高校生フレッシュユな感覚からの発言は、しばしば私に解釈のヒントを与えてくれる。

小論Ⅱのような発想は、参考資料②として挙げた、川島氏の著書の中の論文がヒントになっている。第一章第二節の「紫の上の和歌―『源氏物語』における和歌の機能」と題された論文には、巻巻を隔てて呼応する和歌が存在すること、それを意識しながら読むことで、より深い鑑賞ができることの指摘があった。私は大きな衝撃と感動をおぼえ、その内容を授業の中にも活かしてきた。高校生もまた、川島氏の指摘・豊かな読み方に、深く感動していたことをここに記しておく。